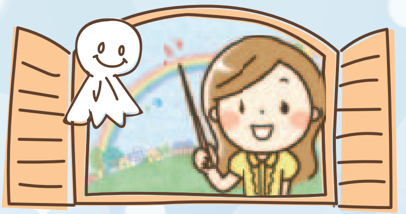
連載 第34回

気象キャスターが解説！ 天気のミカタ

私のアメダス巡礼の1ファイル 千葉県我孫子アメダス



みずこし ゆういち
水越　祐一
神奈川県横須賀市出身。気象予報士、防災士。関西テレビ、NHK大阪、JCOM関西などで気象キャスターを務め、現在はテレビ朝日「大下容子ワイド！スクランブル」の気象情報を担当。

　「アメダス」という言葉は、天気予報でもよく登場するのでご存じの方も多いと思います。気温や降水量、風向風速などを自動で観測する測器のことで、降水量を観測している観測所は全国で約1、300か所、このうち約840か所では降水量に加えて気温、風向風速、湿度を観測していて、雪の多い地方の約330か所では積雪も観測しています。アメダスは、「Automated Meteorological Data Acquisition System」の略ですが、そのまま頭文字を取ると「AMDAS」になるところをあえて「AMeDAS（アメダス）」としたところにセンスを感じますね。私たち気象を生業としている人々の中には、「アメダス巡礼」と言って各地のアメダスを見学して回ることを趣味にしている人が少なからずいます。中には全国を行脚しているつわものもいます。私はそこまで熱心な巡礼者ではありませんが、地方に出張に行った時など、つい足を延ばして観測所の見学に行ってしまいます。今回はそんな私のコレクションから、1つのアメダスをご紹介します。

我孫子アメダス全景（筆者撮影）

　今回ご紹介するのは、千葉県我孫子市にある「我孫子アメダス」です。高い鉄塔には、地上から高さ10メートルに風向風速計が設置されています。気温計は、細い金属製の筒の中にあって、ファンが回って常に外の空気を取り入れています。同じく金属の筒に囲まれているのは雨量計で、雪やあられを溶かすためにヒーターがついています。こんなものを見て喜ぶのは気象関係者だけかもしれませんが、ちょっと興味深いと思ったのは、この我孫子アメダスが設置されている場所は芝生の広がる公園の一角で、看板を見ると公園の名前は「気象台記念公園」と言うそうなのです。

雨量計（筆者撮影）

気温計（筆者撮影）

「気象台記念公園」の看板が（筆者撮影）

　アメダスと気象台は違うよな、と思いつつ、なぜ「気象台記念公園」と名付けられたのか、その由来を調べてみました。この場所には1938年（昭和13年）に「気象送信所」という施設が建てられたそうです。既に日中戦争が始まっていて、気象情報は機密事項になっていました。情報通信の核となる気象送信所は非常に重要な施設で、空爆にあっても耐えられるように設計・施工されていたそうです。では、なぜ千葉県我孫子市にその重要な気象送信所が建てられたのか、そこには日本の気象の歴史における重要人物が浮かび上がってきます。「日本気象学の父」とも言われる岡田武松（おかだたけまつ）氏です。

我孫子にあった「気象送信所」
出典：「千葉県近代建造物実態調査報告書」（千葉県立現代産業科学館）

　岡田氏は1923年〜1941年に第4代中央気象台長を務め、世界に先駆けた海上船舶の無線通信、地震観測網の整備、全国気象官署の国営移管など日本の気象事業の基礎を築きました。また気象用語「台風」の名付け親でもあり、梅雨のメカニズムを解明した気象学者として世界的にも評価されています。岡田氏の偉業の一端を知るエピソードとして、1905年（明治38年）、日露戦争での日本海海戦当日の天気予報があります。この日の天気は、連合艦隊からの有名な電文「本日天気晴朗なれども浪高し」として知られていますが、この元になったのが当時の中央気象台予報課長だった岡田氏の発信した天気予報「天気晴朗なるも浪高かるべし」と言われています。その岡田氏が我孫子市の出身で、「気象送信所」の開設時にここに土地を探して施設を設立することに尽力したそうです。

　衛星通信の発達によって気象送信所はその役割を終えて、1999年（平成11年）に廃止されました。その跡地が公園として整備され「気象台記念公園」となったのです。アメダス巡礼をしていると、たまに「つわものどもが夢の跡」のような歴史に触れることができるのも魅力の一つです。

岡田武松氏
（出典：気象大学校）